

《蒼き狼》とオリエンタリズム

芝山 豊

Aoki Okami (Blue-gray Wolf) and Orientalism

Yutaka SHIBAYAMA

はじめに

「モンゴル国における日本年」とされた2007年は、日本におけるモンゴル学の幕開けとなった那珂通世(1851-1908)による『元朝秘史』訳註書、『成吉思汗実録』の出版から100年目にあたる。そして、奇しくも、『成吉思汗実録』の影響下に小説『蒼き狼』を書いた作家井上靖(1907-1991)の生誕100年でもあった。

小論は、2007年6月、井上靖生誕の地、北海道で開かれた日本比較文学会第69回全国大会における口頭発表を基に、『元朝秘史』と『蒼き狼』をめぐる言説を概観し、日本文学研究からもモンゴル文学研究からも零れ落ちてしまいがちな問題を掘り上げ、モンゴル国からの視点との比較において、そのオリエンタリズムを考察する試みである。

1 『元朝秘史』と『成吉思汗実録』

チンギス・ハーンの生涯と大モンゴルの成立過程を描いた *Mong γol-un niuča to(b)čā'an* (『モンゴルの秘めたる歴史』)と呼ばれる書物は既に明代の「永楽大典」の中で『元朝秘史』として知られている。様々な議論があるが、いずれにせよ、13世紀の後半には編まれていたと考えられる。チンギスの子や孫のハーンとしての正当性を示すための政治的意図があったにせよ、チンギス・ハーンの事跡とモンゴルの成立過程を同時代のモンゴル人が記述したものであるとみてよい¹。そのため、『元朝秘史』は、「歴史」との関わりで議論されることが多い。しかし、文学研究の立場は、この書物の記述が客観的な立場からの「歴史」であるか否かを議論することではなく、この書物が如何なる読者によって、どのように読まれてきたのかを検討することである。

まず注目すべきは、モンゴルの民族的起源に関わる重要な書物『元朝秘史』が長くモンゴルの読者から遠ざけられてきたという事実である。

『元朝秘史』は漢字音標のモンゴル語テキストと傍訳、総訳の漢文で伝わったが、モンゴル文字によるオリジナルは失われていまだに見つかっていない。従って、モンゴル語と漢字に対する十分な知識なくしては解読することはできない。モンゴル人が17世紀の年代記を通しての断片としてではなく、全篇、モンゴル語文字の『元朝秘史』を読むことが可能になったのは、ようやく、1917年になってからのことである。

モンゴル人による、最初の現代モンゴル文字による転写は、1911年に独立を宣言したモンゴル活仏政府のホロンパイルの代表で、知勇公爵と呼ばれたツェンド(1875-1932)が、ブリヤート・モンゴルの碩学、ツェヴェン・ジャムツァラーノ(1880-1940)の入手した「葉德輝」12巻本を縦書きのモンゴル文語に直したものである。残念ながら、この版は長らくモンゴル人の目に触れることはなかった。満州国で教育を受け1950年代にハイラルからモンゴル人民共和国に移り住んだ彼の娘ハンスレンが歴史研究者となり、ようやく、1970年代の初めになって、レニングラードの図書館で父の手稿を目にするのである。

しかし、当時もなお、出版の機会は得られず、手稿影印が出版されたのは1989年のことであった。それも、モンゴルではなく、日本の学術雑誌に掲載されたのである²。この事実は、最近出版されたC・アトゥッドの『モンゴルとモンゴル帝国の百科事典』でも触れておらず、多くのモンゴル人はその事実を知らない。モンゴル現代文章語による『元朝秘史』は、専ら、1947年キリル文字で出版されたII.ダムディンスレン(1908-1986)の業績に帰せられてきた。確かにII.ダムディンスレンの訳は1976年に出版された版によって、広くモンゴルの人々に読まれ、今日に至っている。しかし、ダムディンスレンの訳が出た後もなお、1989年以前、チンギス・ハーンについてモンゴルの人々が自由に話すことは困難なことであったし、今日もなお、モンゴル国以外の地域に暮らすモンゴル族にとって、民族主義と繋がるチンギス・ハーンは常に微妙な話題である。

『元朝秘史』が、1866年、漢語総訳のロシア語翻訳が登場してから、わずかのうちに、日本語で出版されることとなった事情は、単に学問的関心だけではなかった。

明治維新後、日本人にとって、モンゴルという言葉は、ひとつには19世紀的な弱肉強食の地政学的な問題として、もうひとつには、西洋のアジア認識の一部としてもたらされた。まず日本人は自分たちが西洋人からモンゴル人種として数えられているのを知ることになる。OEDの用例が示すように、英語では、mongolという言葉は差別語としても使用されてきた。開国と同時に、19世紀的な西洋のアジア認識との接触の中で、日本人は蒙古人という呼び名の意味を考えざるを得なかった。

素朴な西洋的世界観への接近、また、その批判的受容のプロセスの中で、日本のアジア認識が形成されていくことになるが、その過程で重要な役割を果たすことになるのが『元朝秘史』である。

中華世界の同心円の縁にあった日本が、自らを中心とする帝国を形づくるためには、西洋史に対する東洋史の成立が必要であった。宋代で終わる『十八史略』以降の「歴史」への必要が那珂通世の『元朝秘史』の注訳である『成吉思汗実録』を生み、日本におけるモンゴル研究誕生の契機となった。

1907年という那珂訳『元朝秘史』出版のタイミングが日露戦争後、満州での権益確保が最重要課題となっていた時期と重なることは、当時の日本の国策との関係を否定し得ない。また、那珂が福沢諭吉の「脱亜入欧」思想の直接の影響下にあったことには十分に留意しておかねばならない³。非漢文を通じて、アジア世界を構築することは大日本帝国のあり方と直接つながっていた。日本語訳『元朝秘史』は、その最初の翻訳から、モンゴルの民の物語でありながら、日本の国の物語として読まれるべく運命づけられていたと言えるだろう。

2 『成吉思汗』から『蒼き狼』へ

『成吉思汗実録』は、『元朝秘史』研究の先駆であったばかりでなく、文学者にも大きな影響を与えた。その後、歴史的、言語学的な立場からの、精密な訳が出たにも関わらず、那珂訳が好まれた理由は、漢文読み下しに非漢文的なモンゴル語の要素が加わったエキゾティックな独特な訳文の文体と関わりがあるが、その問題は別稿に譲り、ここでは、『元朝秘史』の内容と日本文学の関わりに絞って論じる。

『元朝秘史』の影響の下に書かれた日本文学の作品と言えば、幸田露伴の戯曲なども挙げられるが、広く大衆に読まれた作品となると尾崎士郎の『成吉思汗』をあげることになるだろう⁴。

『成吉思汗』は昭和15年(1940)、新潮社からの依頼による書きおろしとして出版された。著書の序は、これは金の都に殺到するために長城を突破するところに筆をとどめた第一部であって、成吉思汗の生涯が真にクライマックスを極めた大規模なヨーロッパ遠征以後を第二部として完成させることを約束している。しかし、第二部は発表されることはなかった。

1939年の「ノモンハン事件」と呼ばれるソ連・モンゴルとの戦争の直後に書かれた小説の創作の意図を尾

崎はその序の中で、以下のように説明している。

「その無限に広がってゆく情熱と野心は今日においては古典的物語ではなく、アジア民族の将来の一つの大きな方向を暗示している。作者の意図もまたそこに潜在してゐることは特に説明を加へるまでもあるまい⁵。」

尾崎のいう暗示とは、彼も参照したラーフ・フォックス『ジンギスカン』(1936)の中でも示された通り、日本がかつてのモンゴル族が支配した版図のうゑに汎アジア帝国を再び建設しようとしていることを指している。今日の感覚からすれば、余りに荒唐無稽とも思えるが、当時の日本人が本気でそういう発言を繰り返していたことは、オーストリアのジャーナリストの報告にも記されている通りである⁶。

尾崎は小説の後書きで明快に記している。「生命力と国民感情との有機的関係を明らかにすることである。ここに私の成吉思汗があり、私の夢が成吉思汗の中に形を整えることが出来たとしたら、それ以上のことを私が望むことは僭上の沙汰といふほかあるまい⁷。」

社会主義作家として出発し、『人生劇場』で人気作家となった尾崎の鬱屈とは別に、彼が描きたかったのは「モンゴルの実像」ではなく、「アジアの盟主たる日本が継承すべきリーダーの理想像」であった。

理想のリーダー像を描くからには、彼の描くチンギスは19世紀的な西洋の言説とは対極にある、徳人としての姿でなければならなかった。

ジェフリー・チョーサー(1340?-1400)の『カンタベリー物語』がチンギスを偉大な王として記述したように、同時代のヨーロッパにおいても、チンギスは決して悪魔的な存在ではなかった。近代以後、とりわけ、19世紀的なオリエンタリズムと黄禍論に彩られた言説において、チンギスは血に餓えた征服欲の権化としてイメージ化され、それは、最近のジョン・マンによる伝記まで根強く続いている。

尾崎士郎は小説の後書きに、非モンゴル人によって書かれたチンギス像が偏見に満ちたものであることを指摘しており、彼の主張の多くは現在の学問的知見からも合理性のあるものである。しかし、尾崎は、その負のイメージの根拠とされた『元朝秘史』の挿話を当時のモンゴル人の立場から説明するのではなく、挿話自体を小説から削るという方法で解決しようとした。『元朝秘史』の中の最も劇的な場面のひとつである、テムジンの異母兄弟ベクテル殺害の場面が描かれない理由はまさにそこにある。

尾崎士郎の「人類の理想のリーダー」としてのチンギス像は、チンギスを19世紀的な西洋的な言説のイメージから解放するものであったとも言えるが、一方で、作家の生きる世界の尺度(それ自体、西洋的な言説で構築されている価値観)から評価しようとした。尾崎士郎もまた脱亜入欧の呪縛の中にあった。

尾崎士郎の『成吉思汗』から20年の時を隔てて、戦後日本が新たな節目を迎えた、1960年安保闘争の頃、井上靖が『蒼き狼』を書くことになる。

『文藝春秋』に連載された「蒼き狼」は、当初、尾崎士郎のものと同じく『成吉思汗』というタイトルの長編の第1部としてスタートした。井上靖は当然、尾崎士郎の『成吉思汗』を読んでいたので、書かれなかった第2部の内容を含め、それとは全く違ったものを書くことを意識していたはずである。井上には、尾崎士郎が『成吉思汗実録』から読みこまなかった文学的な要素を加える必要があった。

井上はそのために通俗心理学的合理化という手法を用いた。歴史的英雄の行動に心理的な合理化を行う手法は井上の独創ではなく、日本の大衆小説で既に確立した技法であったと言える。例えば、『蒼き狼』執筆の少し前に溝口健二によって映画化もされた、吉川英治の『新・平家物語』における平清盛の心理的合理化である。井上靖はこれをチンギスに応用したといえることができる。井上が自作を擁護する文章の中で平家物語について語っていることから意識的であるか否かは別にして影響を受けていたと考えてもおかしくない。また、英雄と出生の秘密というのは、源氏物語以来の日本文学の伝統と言ってもよいのかもしれない。

この合理化に根拠を与えるための仕掛けを、井上靖は『元朝秘史』を意図的に誤読することによって用意した。尾崎士郎が『元朝秘史』からそのまま利用し、巧みに、日章旗と大東亜共栄圏のイメージと重ねあわせた「光の精に感じて生まれた子ども」ボドンチャル（チンギス・ハーンの氏族の祖）のイメージを井上は切り捨て、『元朝秘史』の記述によれば、断絶のある《蒼き狼》の血統とチンギス・ハーンを直接結びつけ、狼になることを目指すチンギスとモンゴルを描いたのである。

これが、大岡昇平のこぼれを借りれば、「狼の原理」の発明である⁸。井上靖自身も大岡の言葉を認め、「作品の中で書きたかったことは、氏のいわゆる「狼の原理」なるものに他ならぬ」と記している⁹。大岡が見事に言い当てたように、これは発明であって、チンギスをも含むモンゴル人のあずかり知らぬことであったが、「狼の原理」は《蒼き狼》の名とともに、一人歩きをはじめていくのである。

3 「狼の原理」と他者認識

井上の『元朝秘史』の恣意的な解釈と変更については、文学史上有名な大岡昇平との論争で取り上げられている。その所謂『《蒼き狼》論争』については、やや攻撃的な口調で攻める大岡より、論点をずらして自らの文学性を擁護する井上に同情的な論調が多い¹⁰。しかし、井上の歴史認識の裏にある他者認識という点から考えてみると、歴史文学をめぐる議論とは少し違った側面が浮かびあがる。

まず、小説発表当時のモンゴル人によるチンギス像を見てみたい。

『《蒼き狼》論争』の翌年、1962年、モンゴル人民共和国ではチンギス・ハーンの生誕800周年を祝うはずであった。雪解け以降ソ連の文化状況の中でそれは可能のように見えたのである。その記念すべき年、現代モンゴルの代表的詩人プレブドルジは「チンギス」という有名な詩を書いた。実は、この詩はソビエト・ロシアからの記念行事への干渉の結果、詩人の文学者生命を危機に陥らせることになるのだが、その詩の中に、次のようなフレーズが繰り返されている。

テムジン は 弓から生まれたわけではない

テムジン は 鏃から生まれたわけではない

テムジン は ホエルン＝エヘから生まれたのだ¹¹

モンゴルを生んだのは、井上の「狼の原理」を支える父の血統ではなく、母なのだ。プレブドルジは歌っているのだ。『元朝秘史』の記述に従えば、テムジン（若きチンギス）の母ホエルンは、誰の子であろうと家族として育てる母親である。そして、その態度こそが、小さな氏族集団から、ハイブリッドな多文化集団、大モンゴルを作りあげたのだと言える。実はこれはホエルンだけの特性ではない。現代モンゴルの牧民の家庭を訪れても、ゲルの中にいる子どもたちは血縁の子どもたちであるとは限らない。

『元朝秘史』の系図を素直に読めば、チンギスが蒼き狼の血筋ではないことは明白である。実際、かなり粗雑な読者であった尾崎士郎でさえ、そのことに気がついている。井上は那珂訳の用語を使いながら、那珂の秘史解釈の最も先進的解釈であった冒頭の重要な句点をあえて無視し、大岡が正しく指摘したように、秘史の中の狼が負のイメージで語られて箇所を改竄してまで、「狼の原理」を構築したのである。

しかし、モンゴル国の翻訳では、『元朝秘史』の冒頭部分の《蒼き狼》、即ち「ボルテ・チノ」は、普通名詞の狼（チョノ）と区別される固有名詞として扱われている。漢字音訳でも、ウイグル式縦書きモンゴル文字も、一目で固有名詞の区別はできないが、キリル式の横書き現代モンゴル語では、固有名詞の語頭は大文字で表記する。《蒼き狼》は Бөртэчино 乃至は Бөртэ-чино と表記されている¹²。『元朝秘史』の冒頭では、《蒼き狼》の登場する1節から3節でモンゴル族に言及されるまで、朝鮮族の壇君神話のように、熊が人間に変じるといった説明が一切ないのだから、一般のモンゴル人読者が常識的に文章を追っていけば、ブルテチノという男性がゴイマラルという女性を娶ってオノン河の源流に牧地を構えたと読むことに

全く不自然さはない。

自分の遠祖の名が寅だから、自分は虎にならねばならぬと思いこむ日本人はまず稀であろうから、遠祖が狼に由来する名をもつから、モンゴル人が狼となろうとすると考えるには、かなりの思考の飛躍が必要である。

日本の農業にとっての害獣を駆除してくれる狼が神格化された理由を考えれば、羊を飼う人々にとって、そのアナロジーが通用しないことは西洋キリスト教文化との比較においても自明である。実際、オルドスで連綿と続けられてきた、チンギス・ハーンの祭祀の中でもチンギスが鷹や駿馬に例えられることはあっても、狼にたとえられることない。

「狼の原理」を証拠だてるものは、『元朝秘史』をはじめ、モンゴル人の書いた年代記のどれをみても存在しない。

モンゴルを鷹や馬ではなく、狼の国とする意識の底には、モンゴルに「野生」や「獣性」を見る西洋のオリエンタリズムが潜んでいる可能性を指摘しておきたいが、いずれにせよ、「狼の原理」は、トルコやプロト・モンゴルの始祖伝説を取り込んだというより、井上文学すべてに通底する作家の創作動機と関係していると考えべきであろう。

井上靖は複雑な事情を抱えた祖母のもとで、父母と切り離された体験をもっていた。井上文学には、この体験を反映したと思われる作品が少なくない。

「世俗と常識の世界を切る一本の白い牙のような若い女性を書きたかった」と井上が語った「白い牙」(1951)も、親子の葛藤と、性的な放縦についての嫌悪といったテーマをもつ作品である。

この小説の題名と物語の重要な場面で登場するシェパードの存在から、ジャック・ロンドンの『白い牙』(1940年には新潮文庫の翻訳が出ている)が容易に連想されるであろう。J・ロンドンの『白い牙』が狼の血の入った犬の物語であったことを考えると、「狼の原理」への着想のヒントがおおよそ推測される。

近代文学成立の過程で、日本人が闘ってきたと思った「封建的」家制度は、前近代のものというより、西洋型家族概念が変形されてもたらされた近代性の中の問題であった。井上の拘る血の問題も日本の近代化それ自体の問題であると言ってよい。

井上靖が『蒼き狼』で書きたかったこととしてあげたのは、「出生の秘密」の他に、勿蘭とチンギスの愛の物語であった。小説の中で、勿蘭はチンギス・ハーンを詰問する。

「汝のいま私に対して持っているものは愛であるか¹³？」

源九郎義経が静御前に向かって言う台詞を想像してもこれは誠に奇異な問答である。当時の日本語にもモンゴル語にも、「愛」に当たる言葉は存在しなかった。言葉がなかったということは、人間の情動をそのように分節化する概念が存在しなかったということである。この用法の「愛」は日本語でもモンゴル語でも近代以降、西洋語の翻訳として成立した訳語としての概念である。実際、モンゴル語で「愛」をどのように訳すべきかの翻訳論的な議論は1950年代まで続いていた。

その証拠として、『蒼き狼』が書かれた1960年、モンゴル人民共和国時代のモンゴル文学に、S・エルデネ(1929-2000)の書いた小説「ホランと僕」をあげておく¹⁴。

ホランは『元朝秘史』に登場する女性の名前で、井上が重要なキャラクターとして描いた勿蘭の現代モンゴル語表記である。その名前の女性を主人公にして、チンギス・ハーンという渾名をもつ人物も登場する社会主義時代の日常を描いた短編小説である。チェーホフを目指し、自然科学者らしい心理描写を得意とするエルデネが描く、この男と女の物語の中に、英語で書けばloveにあたる愛ということばは一度も登場しない。

『蒼き狼』について、「歴史的事実を改竄してはしない、叙事詩の解釈は自由だ」という意味のことを井上

靖は繰り返しか述べたが、『蒼き狼』に描かれた「狼の原理」や西洋的なロマンティック・ラブは、チンギスの時代、そして『蒼き狼』発表当時のモンゴル人の生活世界の感覚とは全く一致しないものであった。

結局、井上は、大岡が看破したように、歴史的なモンゴル人を描こうとしていたのではなく、『元朝秘史』の舞台を借りながら、日本の時代劇にすら登場しないような、「近代人」を描いたのである。

勿論、執筆当時、作家は、モンゴル人を読者に想定することは毛頭なく、日本の読者にとってのモンゴル世界を提供することのみを考えていたはずである。井上靖の小説も尾崎士郎の『成吉思汗』同様、日本人のために、「ジンギスカンは義経なり」という妄説をいつまでもロマンだといい募るような日本人読者の期待へ向けて構築されたものである。井上はモンゴル人を他者化しているわけではない。限りなくよりそって、自分たちと同一視していると言ってもよい。

当時、文献（しかも、『元朝秘史』や17世紀年代記以外はすべてモンゴル人以外が書いたもの）でしかモンゴルを知ることのなかった井上は、モンゴル人になりすまして書くのだから、生活世界での抵抗のある要素、文化的なコンテキストを一切取り除くしかなかった。

モンゴル人を共感不能の「絶対の他者」として描いた村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』の欧米型オリエンタリズムのコピーとも、また、バブル経済終焉の頃、司馬遼太郎が描いた物狂いした日本人の対極として理想化されたモンゴル人像に見られる文化本質主義的なオリエンタリズムとも異なり、井上靖の手法は、生活世界の時や場のコンテキストを全く無視した、一種の普遍主義とみなすことができよう。

しかし、歴史的コンテキストさえ無視して、自他の差異を認めない態度は、普遍主義の衣を纏ったエスノセントリズムであると言わざるを得ない。

エスノセントリズムが普遍性を装うが故に、『蒼き狼』と「狼の原理」は批判対象とされることなく、小説や映画、学習マンガまで、無批判にコピーされつづけ、モンゴルに対するオリエンタリズムを再生産していくのである。

4 《蒼き狼》の系譜

モンゴルで撮影され、2006年日本で公開された『蒼き狼 地果て海尽きるまで』は、同年、モンゴルでも一般公開された。好意的な批評も皆無とは言えないが、概ね、モンゴル人からの反応は酷評というべきものである。日本モンゴルの合作映画と称しながら、チンギスはおろか、キャストの中に一人のモンゴル人もいない。これでは、「ハワード・ヒューズのRKOが、アリゾナあたりの砂漠で、ジョン・ウエインをチンギス・ハーンにしたてて撮影したハリウッド映画と変わらない」と評されてもいたしかたない。

映画の原作は、森村誠一の小説『地果て海尽きるまで 小説チンギス汗』（角川春樹事務所、2000年）であるという。《蒼き狼》を冠しているのは、本来、井上靖の原作に基づくモンゴルでの映画製作プロジェクトが、訴訟にも発展したほどの紆余曲折の後、たどり着いた結末である。

森村誠一は原作となった作品中に《蒼き狼》ということばを用いておらず、そこには本来のモンゴル語の意味にやや近い「灰色の狼」が使われている。しかし、森村誠一は井上靖の「狼の原理」を批判することなく、そのまま踏襲している。1206年とされるチンギスの第二次即位の場面で、「テングリより地上に送られた灰色の狼の末裔として、ここに余を中心として灰色の狼の国が建てられた」とチンギスに言わせている¹⁵。まるで、井上靖が『蒼き狼』で書いた第二次即位場面を何かの史書からの引用であると思いこんでいるのではないかとさえ思わせるほど『蒼き狼』と似ている。（もっとも、映画の方は国家観的側面より、プロデューサーである角川春樹氏自身の抱える父源義氏との葛藤を反映させたためか、井上靖の改竄からも逸脱して、『元朝秘史』とは無縁の父と息子の物語になってしまっている。）

ここで、注目したいのは、その角川映画の宣伝で繰り返された「人は彼を蒼き狼と呼んだ」というキャ

ッチ・コピーである。

日本国内で売られている諸外国で作られたチンギス・ハーンに関する映画の多くに、原題にはない「蒼き狼」という言葉が冠されている。従って、このコピーの言う「人」は、作家井上靖の一人のことではなく、一般化された they だと思われる。しかし、実際には、they というより、we である。そして、we の中にはさしあたり日本人しか入らないのだが、そのことを知る人は少ない。

しかも、we の共同体規制は、極めて強固なもので、モンゴルをフィールドとする研究者までも、このイメージから無縁であることが許されないのである。

例えば、2006 年に出版された中公新書『チンギス・カン “蒼き狼” の実像』の中で、気鋭の考古学者は次のように述べる。

「その後、井上靖氏がこの訳語をチンギス一代を扱った自作のタイトルに使い、それがベストセラーになったため、蒼き狼＝チンギスと一般に広まった。もちろん、これは誤りである。・・・(中略)・・・そこで、私は、モンゴル族が自立し、強大化していった過程を“蒼き狼の時代”と形容したいと考える¹⁶⁾。」

チンギス＝《蒼き狼》が間違いだと知る人々が、一般の誤解によるイメージをなぞって、自説を展開していることはこの問題の根深さを示すものとも言えるだろう。

1960 年代生まれの世代に限ったことではない。1950 年代生まれの大モンゴル時代を専門とする代表的な歴史研究者たちも、一般書においては、そのイメージを援用しているし、モンゴル学関係の学会会長を歴任する 1920 年代生まれの言語学者、小澤重男東京外国語大学名誉教授が 1994 年に出版した岩波新書『元朝秘史』の帯には、「モンゴルの“蒼き狼”チンギス汗の一代記 謎の文献に挑む」という文字が躍っている。

問題は、単に、知識の不足から来るのではないということである。それほどまでに、我々の解釈共同体の中に、《蒼き狼》と「狼の原理」がしっかりと組み込まれてしまっているのである。

「狼の原理」にもとづく《蒼き狼》の物語は 1960 年代からの日本の世界観の中に通底する戦後版の脱亜入欧の物語であり、モンゴルをモンゴルの生活世界から切り離す物語であり続けた。

それを端的に示すのは、野田秀樹の戯曲『キル』である。

野田秀樹が劇団夢の遊眠者解散後、1994 年、初めて公演したこの劇は、テムジンの物語である。キルは、着るであり、また斬るであり、おそらく kill でもある。テムジンは「制服」で世界を「征服」するファッション・デザイナーとして、登場するのだが、あくまで、舞台はモンゴルである。

人形：「あんなに冷たい親父を、こんなに慕っていたなんてね。」

テムジン：「違う！俺は蒼き狼が好きなんだ。学校にもろくすっぽ行けない。コトバも知らない。俺の体が覚えたのはミシンのリズムだけだ。俺には知性ってものがからつきしない。・・・[中略]・・・でも、蒼き狼の話の聞くと、なんか、体の底から、うおーって、声が出てくる。ひとつきりなんだ、俺の物語は。それも飛びつきり素敵な天からやってきた蒼き狼だ。その血が俺の体に流れている。それだけが俺の誇りなんだ¹⁷⁾。」

野田が、蒼き狼が自らの幻である蒼い狼と対決する場面を設定したことは興味深い。「蒼き」と「蒼い」異なる語感はその音から来る。しかし、色彩においては、野田は意識的に蒼を灰色ではなく、青空の色だと決めている。終幕、テムジンの死と誕生を示す場面で、それまで一度も使わずにいた青い布を舞台一杯に広げ、「とびつきりに蒼空を着せてあげてくださいよ」という台詞で舞台を閉じるのである。

父子の葛藤とファッションによる経済的世界制覇の「狼の原理」を語る台詞は、野田の『キル』が、まさしく井上の『蒼き狼』の血をひいていることを明快に示している。

「モンゴルの少年ならば皆な、蒼き狼になりたがる。モンゴルの少年は、蒼き狼を夢に見る」という言い切りは、角川映画の宣伝で繰り返された「人は彼を蒼き狼と呼んだ」というキャッチ・コピーに直結している。

集英社版の学習漫画、長澤和俊 集英社・学習漫画世界の伝記『チンギス・ハン』の左に示す場面は、それを端的に裏付けている¹⁸。

これを読む多くの日本の子供たちは、ホエルンがテムジンに始祖伝説について語るという『元朝秘史』はおろか、井上靖の『蒼き狼』にさえ存在しない場面とともに、自分たちもモンゴル人も「狼がかっこいい」と当然思うのだと刷り込まれていくのである。

21世紀になってからも、日本文学の中で、チンギスを主人公とする作品が幾つか書かれた。

2006年に発行された津本陽(1929-)の小説『草原の覇王 チンギス・ハーン』が1巻400頁余りであるのに対して、日本経済新聞の連載小説を改稿して2007年に完結した堺屋太一(1935-)の小説『世界を創った男 チンギス・ハン』は、多くの注を含む4巻本である。



津本も堺屋も、井上靖が尾崎士郎と違うものを書こうとしたように、『蒼き狼』からは距離をおこうとしているように見える。とりわけ、堺屋は、チンギスが「残念ながら」蒼き狼の血を引いていないことを、研究者の系図を引用して強調している。

しかし、小説『世界を創った男 チンギス・ハン』は《蒼き狼》の血を引いていないのだろうか。

堺屋太一は小説の最後を以下のように結んでいる。

「チンギス・ハンの生涯は、同時代の人々と正反対だ。

信仰と身分と自給自足に縛られた中世で、チンギス・ハンだけは信仰の自由と身分差別の解消と世界規模の交易を目指した。

この男は中世の都市と秩序の破壊者だった。だからこそ、中世にはなかった「世界」を創ることができたのである¹⁹。」

ここで、堺屋太一もまた、彼の「狼の原理」を述べているのである。かつて経済企画庁長官を務めた作家の頭にあるのは、今日のIT革命やグローバルな市場原理である。それは、1940年や1960年の日本の曲がり角で、チンギスが語られたように、「失われた10年」の後、日本がどこへ行くのかという国家的な関心につながっている。

小説本文ではなく、その後に付された長い注の末尾、つまり、全巻の最後を作家は次のように唐突に締めくくる。

「チンギス・ハンは最後まで遊牧民として生き、グローバルな未来に志を燃やしつつ死んだのである²⁰。」

作家は、遊牧の生活世界のコンテクストから切り離されたグローバルな普遍性の中のチンギスを語りながら、また同時に、彼が寡欲な遊牧民として生きたと語るのである。

この矛盾に満ちた言説は、決して遊牧民の側からのことばではありえない。遊牧民の運命はまさに今日のグローバル化の中で潰えようとしているのである。堺屋太一の描くチンギスもまた、「残念ながら」、日本のビジネスマンに向けた、グローバルな市場主義という「狼の原理」に貫かれており、普遍を装ったエ

スノセントリズムという《蒼き狼》の血を受け継いでいると言わねばならない。

5 グローバル化する《蒼き狼》

日本人の発想から生れ、モンゴル人には理解し難いはずの井上靖の『蒼き狼』は、漢語訳より早く、1981年モンゴル語に翻訳されることになった。

内モンゴルでの日本語からの翻訳である。出版当時のことを知るあるモンゴル人の証言によると、やはり、「狼の原理」の部分については出版局でもかなりの議論が行われたようである。しばらくして、1989年、内モンゴルで出た縦書きモンゴル文字をキリル文字に転写し直したものが、モンゴル人民共和国作家同盟の機関紙『ツォグ』に連載された。

『蒼き狼』の翻訳には、チンギス・ハーンの伝記を、その名前を直接題名に出すことなく、チンギスを敵とした国の下で出版できる点で、南北モンゴル人にとってメリットのあることであった。

なにより、西洋的な絶対の他者としての野蛮な悪魔としてのチンギス像とは異なるチンギスとモンゴルが描かれていることが彼らにとって重要であった。

さらに、民族と国家を敢えて混同し、大モンゴルが近代の国民国家であるかの如く描いて見せた井上の1206年大ハーン即位場面は、内モンゴルなど国家を持たないモンゴル諸族にとっては見果てぬ夢であり、「想像としての共同体」としてのモンゴル国の国民にとっては、国家的幻想そのものの象徴であったと言えるであろう。

しかし、『蒼き狼』は当時のモンゴル人にとって新鮮な驚きであると同時に、そこに描かれたモンゴルや「狼の原理」は、南北いずれのモンゴルにおいても、生活意識からは、強い抵抗感を感じさせるものだったことは間違いがない。

モンゴル語とそれに続く漢語訳の登場は、中国では、サイフ（塞夫）監督の1998年の『成吉思汗』にも影響を与えたことは間違いない。サイフ作品では、一族から見放されたチンギスの母ホエルンが自ら狼を殺して、テムジンたちに食べさせる場面が挿入される²¹。

この場面の解釈は、モンゴル人の中でも様々だが、例え、生活様式が漢化したモンゴル族であっても、自らを狼の血族だという日本的な言説を素直に受け入れることはないことを示している。

しかし、最近、モンゴル人の間でも自らをその血族とは言わないまでも、狼を瑞兆とみなすような人々が現れた。狼に対するモンゴル人の言説に変化が生じている²²。

背景には幾つかのことが考えられるだろうが、ひとつには、西洋の狼に対する言説が、ユダヤ・キリスト教文化の中で培われたイメージ、シンボルから変化をみせていることがあげられる。エコロジカルな観点から狼の存在がプラスの方向に変化している。そうした言説の変化は、狼と戦わねばならないような生活世界が地球上からほぼ失われてしまったことを意味している。モンゴル国の牧民は人口の過半数を下回り、せいぜい3分の1に過ぎない。モンゴルの人々もまた確実にモンゴルの自然に根ざす生活世界と切り離されつつある。

特に海外で暮らすモンゴルの若い世代同士のWEB上でのやり取りの中には、狼についての伝統の組み換えが起こっていることが認められる。ちなみに、インターネット時代になって、『蒼き狼』は大きく世界に拡大していく。1985年にオリジナルが出て1987年から『蒼き狼と白き牝鹿・ジンギスカン』という名称で発売されたビデオ・ゲームは、歴史シミュレーションゲームとして何度も版を改めて、コンピュータや各ゲーム機のフォーマットで発売され、海外版としても販売されており、現在はWEB上や携帯電話からもダウンロードできるようになっている。

また、モンゴル人が最新の英訳『元朝秘史』を読むことも可能である。その冒頭は、At the beginning there

was a blue-gray wolf, born with destiny ordained by Heaven Above となっている²³。ダムディンスレンの現代モンゴル語訳は、いまでは、幾つかある訳の一つに過ぎない。また、モンゴルの都会で暮らす、家畜を飼わない人々にとって、狼は害獣ではなく、外国からの外貨をもたらす有益な動物である。

グローバル化の中で、チンギス・ハーンもこれまでのモンゴル世界の価値とは異なる役割を振り当てられようとしている。アメリカからのモンゴル援助のアドバイザーでもある米国研究者はモンゴル近代化の中でのチンギス・ハーン評価を概観した文章をこう締めくくっている。

「モンゴルはユニークで貴重な土着文化とともに、実行可能な、民主主義的で、西洋志向の、自由市場経済的な自己のアイデンティティを確立しようとしている。そのために、国民をふるいたたせる国家のアイデンティティと世界のイメージを再定義し、同時に、800年前から残された否定的なイメージを修正しようとしている。その鍵は、チンギス・ハーンの再定義とその象徴性の刷新にある²⁴。」

アメリカ合衆国は、モンゴル国にイラク派兵を求め、さらに旧ソ連の基地のあった場所で大規模な合同軍事演習を行い、その演習を「ハーン・クエスト」と名づけた。

埋蔵資源の確保で、アメリカやロシアの後塵を拝することになった日本は、2006年、交代する小泉純一郎首相の最後の訪問国にモンゴルを選び、大モンゴル成立800周年記念行事の一環としての政府政庁前のチンギス・ハーンの銅像の序幕式に立ち会った。同じ頃、前述の『世界を創った男 チンギス・ハン』の作者が演出するチンギスの騎馬軍団ショーがウランバートル郊外で演じつつけられていた。

西洋や日本などのオリエンタリズムの言説を逆手にとって举行された大モンゴル成立800周年記念行事は、1962年に頓挫したチンギス・ハーン記念行事のトラウマを癒すものであった。しかし、それは、決して『元朝秘史』世界の再現ではなく、日本が脱亜入欧を求めつつけたように、遊牧的生活世界を半ば自己植民地化して、グローバルな諸価値を受け入れるための儀式であったと言っても過言ではない。既に2001年の5月、エンフバヤル（現大統領）は、「モンゴルはもはや遊牧の国ではない」と海外メディアとのインタビューで語り、その後、まもなく、モンゴルの土地所有の制度が正式に始まった。そのインタビューのタイトルはNo Rooms for Nomadsである²⁵。

モンゴル国だけのことではない。2007年、内モンゴル自治区成立60周年行事の中で、チンギス・ハーンの栄光を顕彰した内モンゴルにおいて事情はさらに深刻である。

『天上草原』で知られるモンゴル人俳優ニン・ツァイ（1963-）が監督した『季風中的馬』（2005年）がそれをよく示している。邦題は『白い馬の季節』となっているが、映画の中で馬はサーラルというモンゴル語で呼ばれている。モンゴル人民共和国のD. ナツァグドルジがサーラルに乗ってひたすら駆ける若者を描いた「ショボーン・サーラル」（1930年）という散文詩のような小説は、モンゴルの生活世界のコンテクストのうちに成立していた。しかし、この映画の老いたサーラルは、草原の祝別を受けた後、乗り手を失い舗装道路を力なく進んでいく。配給会社が邦題をつけるときに意識したはずの『スーホの白い馬』の連想から、ステレオタイプの草原文化の映画を想像した日本の観客は大いに期待を裏切られたことだろう。

環境保護の名目で牧地を追われる遊牧民の姿を描くこの映画の中で、金策にやって来た主人公を、すげなく追い返すボルジギン（チンギスの家系）を名乗る幼馴染の俗物画家（彼は映画の後半で思いがけなく主人公を救うことになるのだが）の姿は、生活世界を自己植民地化して、モンゴルを脱コンテクスト化していく「狼の原理」の末路である。

むすび

1989年に製作されたウルリケ・オットィンガー監督の『モンゴルのジャンヌダルク』という映画がある²⁶。7人の西洋人女性がシベリア鉄道で移動中、モンゴル人の騎馬女性の一団に拉致されて、モンゴル人の生活

を強いられるという物語である。Lesbian and Gay Film Festivals に出品されていることから分かる通り、映画紹介に散見される女性版の「アラビアのロレンス」といった比喻で分かるような話ではない。モンゴル人が西洋を押し付けられるように、西洋人がモンゴルを押し付けられること、さらにそれがジェンダー役割の押し付けへという何層かの仕掛けがあるらしい。勿論、この映画のスチル写真だけでも西洋のオリエンタリズムを読むことはできる。しかし、この映画の頃から、西洋のモンゴル観にも変化が起りつつあったと言えるだろう。

一方で第18回東京国際映画祭に出品された山西省出身の寧浩監督（1977-）による『モンゴリアン・ピンポン』（2005年）は、まるで南アフリカ映画『ブッシュマン』（THE GODS MUST BE CRAZY, 1981年）を見ている錯覚に陥るほど露骨なオリエンタリズムに満ちている。

オリエンタリズムは西洋対東洋の課題だけではなく、東洋対東洋の問題になっているのである。

日本は、脱亜に全力を傾け、外に向けては、西洋のモデルの植民地主義と、内に向けては、生活世界を西洋的な言説で自己植民地化をしながら近代化を推し進めてきた。同時に脱亜入欧の姿を無自覚に他者に押し付けようとしてきた。

支配の正当化・合理化の役割を果たした西洋のオリエンタリズム同様、日本のオリエンタリズムも、脱コンテクスト化するグローバル市場原理の支配の正当化・合理化への役割を果たしている。《蒼き狼》の「狼の論理」も《蒼き狼》も決して無邪気なロマンではあり得ないことを忘れてはならないのである。

かつて、「満蒙」が日本の生命線と言われた時代から、一転して、探検的な興味以外には顧みられることも稀であった時代を経て、今日、モンゴルは再び日本にとって経済や安全保障上極めて重要な位置を占めるに至っている。それに関わらず、あるいはそれ故に、プロ・スポーツの話題から、小説、漫画、映画、コンピュータゲームに至るまでモンゴルに対する言説の多くが、E・サイードの言う意味でのオリエンタリズムに満ちたものである。

2007年、日本では、「朝青龍問題」と呼ばれる一連の騒動があった。これと同じ程度の情熱や執拗さをもって、モンゴルでの土地私有化による貧困問題や日本のODAをめぐる商社の不祥事や、あるいは地下埋蔵資源の開発による健康被害が報道されることはなかった。横綱が《蒼き狼》の子孫でなく、金髪碧眼の西洋人であっても反応は同じだっただろうか。問題となった個人や団体の問題とは別に、連日の異常な取材と報道の裏には、異なる文化的コンテクストを無視したエスノセントリズムがあったことは否定できない。

サイードが指摘したオリエンタリズムの構造は、西洋と東洋の二項対立、西洋的な自己とは正反対の他者を押し付けることを中心に理解されてきた。しかし、日本におけるオリエンタリズムは西洋と東洋の二項対立だけではない。《蒼き狼》と「狼の論理」は、モンゴルを他者化することはない。だが、その自己同一化は、モンゴルを《野蛮》のうちに閉じ込めようとする西洋のオリエンタリズムと同じ根をもつ「脱亜」日本のエスノセントリズムであり、日本型のオリエンタリズムである。《蒼き狼》は、グローバル化の中で、モンゴルの生活世界の脱コンテクスト化を正当化する役割を担って、今も走り続けている。

¹ 小論では、引用を除き、チンギス・ハーンという表記を用いる。これは、ハン（カン）、ハーン（カガン）の歴史的な用語の厳密さより、『元朝秘史』以来、今日に至るまで、モンゴル人がチンギスをそのように記述し、その記述に意味を見出してきたことを意識しているためである。

² Б. Цэнд, *МОНГОЛЫН НУУЦ ТОВЧОО*（『モンゴル研究』No.12, 1989年）。手稿写真版の他、ハントスレンにより出版までの経緯と父ツェンドに関する情報が含まれている。

³ 田中正美「那珂通世」、江上波夫編『東洋学の系譜』（大修館書店、1992年）、5頁。

⁴ この小説が当時の読者、特に若い読者に、広く受容されたことは、田辺聖子『欲しがりません勝つまでは 私の終戦まで』（新潮文庫、1981年）、209頁が示す通りである。

⁵ 尾崎士郎『成吉思汗』（新潮社、1940年）、2頁。

⁶ コリン・ロス、金森誠也、安藤勉訳『日中戦争見聞記 1939年のアジア』（講談社学術文庫、2003年）、159頁。

- ⁷ 尾崎士郎『成吉思汗』（新潮社、1940年）、319頁。
- ⁸ 大岡昇平「『蒼き狼』は歴史小説か 常識的文学論（1）」『群像』、1961-1）。
- ⁹ 井上靖「自作『蒼き狼』について 大岡氏の『常識的文学論』を読んで」、『群像』1961-2、175頁。
- ¹⁰ 柴口順一『大岡昇平と歴史』（翰林書房、2002年）のように大岡側に立つ言説にも同様の傾向がある。
- ¹¹ Д.Бребулдж, 内田敦之訳「チンギス」、芝山豊・岡田和行編『モンゴル文学への誘い』（明石書店、2003年）、27-29頁。
- ¹² Ц. Дамдинсүрэн, *Монголын нууц товчоо* (УБ., 1976), Ш. Гаадамба, *МОНГОЛЫН НУУЦ ТОВЧОО* (УБ., 1990)
- ¹³ 井上靖『蒼き狼』（新潮文庫、改刷版、2005年）、202頁。
- ¹⁴ С.Эрдэнэ, “Хулан бид хоёр”, 1960. *Монголын Уран Зохиолын Дээжис* 31 (УБ., 1997) .
- ¹⁵ 森村誠一『地果て海尽きるまで 小説チンギス汗』（ハルキ文庫、2005年、）292頁。井上靖『蒼き狼』（新潮文庫、改刷版、2005年）、215頁を参照。
- ¹⁶ 白石典之『チンギス・カン “蒼き狼”の実像』（中公新書、2006年）、7頁。
- ¹⁷ 野田秀樹『解散後全劇作』（新潮社、1998年）、17頁。
- ¹⁸ 長澤和俊監修『学習漫画世界の伝記 チンギス・ハン』（集英社、1992年）、32頁。この漫画には、蒼き狼は動物として描かれ、テムジン一家には、狼の旗なども描かれている。尚、井上靖『蒼き狼』では、テムジンは父祖伝説を古老から聞き、母がその意味を解説したであろうとしている。
- ¹⁹ 堺屋太一『世界を創った男 チンギス・ハン 4天尽地果』（日本経済新聞社、2007年）、249頁。
- ²⁰ 堺屋太一『世界を創った男 チンギス・ハン 4天尽地果』（日本経済新聞社、2007年）、291頁。
- ²¹ 日本で発売されたDVDのカヴァーは『蒼き狼 チンギス・ハーン GENGHIS KHAN』（BWD-1200）である。
- ²² 丸山直樹・須田知樹・小金澤正昭編著『オオカミを放つ』（白水社、2007年）を参照。その第八章はモンゴル人による「モンゴル人のオオカミ観、今昔」となっている。
- ²³ Igor de Rachewilts, *The Secret History of Mongols*, Leiden, 2006, p.1. 尚、この訳の注には、モンゴル人が蒼き狼を、動物ではなく、人間として解釈することが記されている（p.224）。
- ²⁴ Alicia J. Campi, “Globalization’s Impact on Mongolian Identity Issues and the Image of Chinggis Khan”, in Schwarz Henry G. ed., *Mongolian Culture and Society in the Age of Globalization* (Western Washington University, 2006), p.93.
- ²⁵ David Murphey, “No Rooms for Nomads” *Far Eastern Economic Review*, May 31, 2001
- ²⁶ この映画のDVDは現時点では日本では販売されていない。この映画の情報としては、Katie Trumpener, “Johanna d’Arc of Mongolia in the Mirror of Dorian Gray: Ethnographic Recordings and the Aesthetics of the Market in the Recent Films of Ulrike Ottinger” *New German Critique*, No. 60, Special Issue on German Film History. (Autumn, 1993), pp. 77-99.や Janet A. Kaplan; Ulrike Ottinger, Johanna d’Arc of Mongolia: Interview with Ulrike Ottinger, *Art Journal*, Vol. 61, No. 3. (Autumn, 2002), pp. 6-21 がある。

参考文献

井上靖 「自作『蒼き狼』について 大岡氏の『常識的文学論』を読んで」『群像』、1961-2）

『井上靖全集』第1巻 （新潮社、1995年）

『井上靖全集』第8巻. （新潮社、1995年）

『井上靖全集』第12巻. （新潮社、1996年）

『井上靖全集』第28巻 （新潮社、1997年）

『井上靖全集』別巻 （新潮社、2000年）

『蒼き狼』（新潮文庫、改刷版、2005年）

大岡昇平「『蒼き狼』は歴史小説か 常識的文学論（1）」『群像』、1961-1）

『大岡昇平全集15』（筑摩書房、1996年）

尾崎士郎『成吉思汗』（新潮社、1940年）

小沢重男『元朝秘史全訳（上）』（風間書房、1984年）

『元朝秘史』（岩波新書、1994年）

小林高四郎『元朝秘史の研究』（日本学術振興会、1954年）

柴口順一『大岡昇平と歴史』（翰林書房、2002年）

堺屋太一『世界を創った男 チンギス・ハン』1～4（日本経済新聞社、2007年）

芝山豊「村上春樹とモンゴル もうひとつのオリエンタリズム」(『モンゴル研究』No.17, 1998年)

「司馬さんのモンゴル」(『モンゴル研究』No.18, 2000年)

芝山豊・岡田和行編『モンゴル文学への誘い』（明石書店、2003年）

白石典之『チンギス・カン “蒼き狼”の実像』（中公新書、2006年）

-
- 田中正美「那珂通世」, 江上波夫編『東洋学の系譜』(大修館書店, 1992 年)
- 田辺聖子『欲しがりません勝つまでは 私の終戦まで』(新潮文庫, 1981 年)
- 津本陽『草原の霸王 チンギス・ハーン』(PHP 出版, 2006 年)
- 那珂通世譯注『成吉思汗實錄』(大日本圖書株式會社, 1907 年)
- 長澤和俊 集英社・学習漫画世界の伝記『チンギス・ハーン』(集英社, 1992 年)
- 村上正二訳注『モンゴル秘史 チンギス・カン物語』1, 2, 3(平凡社, 1970 年)
- 丸山直樹・須田知樹・小金澤正昭編著『オオカミを放つ』(白水社, 2007 年)
- 森川哲雄『モンゴル年代記』(白帝社, 2007 年)
- 森村誠一『地果て海尽きるまで 小説チンギス汗』(角川春樹事務所, 2000 年)
- 楊海英『チンギス・ハーン祭祀 試みとしての歴史親類学的再構成』(風響社, 2004 年)
- Atwood Christopher P., *Encyclopedia of Mongolia and the Mongol Empire* (New York, 2004)
- Campi Alicia J., "Globalization's Impact on Mongolian Identity Issues and the Image of Chinggis Khan", in Schwarz Henry G ed., *Mongolian Culture and Society in the Age of Globalization* (Western Washington University, 2006)
- Schwarz Henry G ed., *Mongolian Culture and Society in the Age of Globalization* (Western Washington University, 2006)
- Rachewilts Igor de, *The Secret History of Mongols*, (Leiden, 2006)
- Trumpener, Katie, "Johanna d'Arc of Mongolia in the Mirror of Dorian Gray: Ethnographic Recordings and the Aesthetics of the Market in the Recent Films of Ulrike Ottinger" *New German Critique*, No. 60, Special Issue on German Film History (Autumn, 1993)
- Kaplan Janet A., "Johanna d'Arc of Mongolia: Interview with Ulrike Ottinger", *Art Journal*, Vol. 61, No. 3 (Autumn, 2002)
- III. Гаадамба, *МОНГОЛЫН НУУЦ ТОВЧОО* (УБ., 1990)
- Ц. Дамдинсүрэн, *Монголын нууц товчоо* (УБ., 1976)
- Б. Цэнд, *МОНГОЛЫН НУУЦ ТОВЧОО* (『モンゴル研究』No.12, 1989)
- Д.Пүрэвдорж, Чингис *Монголын Уран Зохиолын Дээжис 2* (УБ., 1994)
- С.Эрдэнэ, "Хулан бид хоёр", 1960. *Монголын Уран Зохиолын Дээжис 31* (УБ., 1997)
- Borte cinu-a (Yapon) Ino Uye Yasesi jokiyaba* (Begejing : Undusuten-u Keblel-un Qoriy-a, 1981)

(受付日 2008 年 1 月 21 日)

SUMMARY

This is a study of Japanese literary Orientalism on Mongolian people. This essay examines the emergence of a popular image of Genghis Khan in Japan, which was created by Inoue Yasushi (1907-1991) in his historical novel *Aoki Okami* (1960), inspired by *The Secret History of the Mongols* (13th century). Focusing on Inoue's "*Okami no Gennri*", which is derived from decontextualization of Mongolian *Labenswelt*, or life-world, the article discusses the influence of the novel on Japanese society and the reasons why Japanese writers in the 21st century, e.g. Sakaiya Taichi(1935-), inherited Inoue's Orientalism, which is justifying the domination of globalization.